

メルヴィルと鯨 ——どちらがより残酷か、鯨か人間か？——

五十嵐 博*¹

Melville and His Sharks —— Which is More Brutal, Shark or Man? ——

Hiroshi IGARASHI

Abstract

Melville first turned the spotlight on sharks amid the diverse marine life he described in *Mardi*, before he zoomed in on whales in *Moby-Dick*. Sharks are depicted as cruelty incarnate and as symbolic marine animals occupy the second most important position after whales in his works.

Which is more savage and brutal, shark or man? This seems to be an implicit question Melville poses in his books where sharks appear as a metaphor of cold-hearted and merciless men in the cruel sea of the human world and as a symbol of horrible death.

Human brutality, particularly white civilized men's, directed to both animals and humans is vividly depicted and strongly criticized throughout his books. We can see his deep love of life, human or animal equally, behind the pitiful and pathetic scenes in which cattle, pigs, geese, and whales are atrociously killed for human profit and welfare. Human barbarity toward humans is most luridly evinced in wars whose inhuman cold-bloodedness is partially narrated in *White-Jacket*, and the gruesome naval battle fought under "the grinning Man-in-the-Moon" in *Israel Potter* epitomizes human intrinsic savagery beneath the mask of civilization.

Sharks followed Melville throughout his life and in the poems he wrote toward the end of his life, they reappear as an agent of cruel death.

1. はじめに——メルヴィルにとって鯨とは？

アメリカが世界最大の捕鯨国であった19世紀に生き、しかも自らも捕鯨船員として太平洋を巡ったハーマン・メルヴィル (1819-1891) は、鯨、それも白い鯨と結び付けられて後世にその名と作品を残しているが、彼が最初にスポットライトを当てた海の生き物は、鯨ではなく、鯨であった。第3作『マーディ——そこでの航海』(1849) で彼は海洋生物の描写に数章を割いているが、その中で鯨の描出に最も多くの言葉を費やしている。そして第5作『ホワイト・ジャケット——軍艦内の世界』(1850) では屍衣のように白いジャケットをホホジロザメになぞらえ、第6作『モービー・ディック——鯨』(1851) では鯨の屍体をむさぼり食う南海の鯨の群れを描出している。メルヴィルにと

って鯨とは、どのような存在だったのか？本稿ではこの疑問に答えたい。

2. 鯨と人間——冷酷、残忍、無慈悲

メルヴィルは海を残酷な人間世界と人生のメタファーとして、そして鯨を残忍な人間たちのメタファーとして認識していた。メルヴィルの鯨の描出は『マーディ』と『ホワイト・ジャケット』では助走段階にすぎず、『モービー・ディック』で本格的に行われるが、その鯨の描き方を見ると、彼は、鯨と人間のどちらがより冷酷無慈悲で残酷かと読者に問いかけているように思える。

2.1 『マーディ』の鯨

メルヴィルは『マーディ』の導入部——第1章から第38

章——で、海洋のさまざまな姿を生き生きと描出している。捕鯨ボートによる航海の様相、および中・南太平洋の朝、昼、夕、夜の海の姿、海洋生物、そして天空の星座などを細かに描いているが、海洋生物の叙述と描写では鯨に関して最も多くの言葉を費やしている。

彼は「陸上の人間よりも多数の鯨が海にいる」(*Mardi*, 40)¹⁾ と言って、計7種の鯨に言及するが、まず4種の鯨——Bone Shark (ウバザメ)、鯨の屍肉の周りを泳ぐ「深海のハゲワシ」(*ibid.*) と呼ばれる Brown Shark (ネコザメに似た褐色の鯨)、「悪鬼のように冷酷」(*ibid.*) に見え「冷血な」(*ibid.*) 雰囲気をもつ Blue Shark (ヨシキリザメ)、はぐれた船乗りを捕食するので船乗りたちが憎悪する Tiger Shark (イタチザメ)——を紹介し、これらの鯨の外観と行動パターンに関する一般的認識を語った後で、この認識は誤りであり、鯨は他の生き物や人間と同様に愛すべき存在であると述べている。

ただし、White Shark (ホホジロザメ) だけは例外で、メルヴィルはこれを嫌悪し、死霊や人間嫌いのタイモンになぞらえて、次のように語る。

すべての鯨の内、ぞっとするホホジロザメからだけは我を救い給え。我々は何にせよ憎むべきではないが、ある種の嫌悪は本能的なもので、嫌悪は憎悪とは異なる。私はホホジロザメとは親しくも仲良くもなれない。彼は、はつらつとした親愛の情を取り付ける類の生き物ではない。

この死霊のような鯨に出会うことはまれであり、その姿は昼よりも夜になるとはっきりと見える。タイモンのように、彼は常に一人で泳ぐ。水面下すれすれのところを滑るように動き、時折、ぼうっとした乳白色の長い姿態を現しながら、白い歯の奥の底知れぬ穴を垣間見せる。(Mardi, 41)

このように死を直ちに連想させ、死の使者と見紛うようなホホジロザメを紹介した後、メルヴィルは、鯨の背に乗り尻尾で叩いて攻撃する Thrasher (オナガザメ) や、パイロットフィッシュ (水先案内魚としてのブリモドキ) に先導されて進む Shovel-nosed Shark (カグラザメ、サカタザメ、またはシュモクザメ) について語るが、彼がここで紹介する全7種の鯨の内、『マーディ』後の作品でその固有名が登場する種は、彼が嫌悪するホホジロザメのみであり、彼は、このホホジロザメを『ホワイ・ジャケット』と『モービィ・ディック』に、死のイメージを付与して登場させる。

2.2 『ホワイ・ジャケット』の鯨

『ホワイ・ジャケット』に鯨が、ホホジロザメが登場するのは物語の最終局面であるが、実際にホホジロザメが出現するのではなく、白ジャケットがホホジロザメに見間

違えられるというかたちでその心象が現れるのである。物語の結末でネヴァーシンク号がヴァージニア沖に差しかった際、メインマスト上で作業をしていた「私」は手違いから30メートル下の海に落ちる。「私」は海面へ浮上しようとするが、水中で膨らんだ白ジャケットのせいで身動きがとれず、ベルトに挟んでおいたナイフで「自分自身を切り開くかのように」(*WJ*, 394)²⁾ してジャケットを切り裂いて脱け出て、海面に顔を出す。「私」は白ジャケットに対して「沈め、沈め、屍衣よ!」(*ibid.*) と思い、一方、艦の乗員たちは白ジャケットをホホジロザメと思って、鉈を何本も打ちこんで沈める。

ホホジロザメと見間違えられる白ジャケットは『モービィ・ディック』の白鯨の先駆的象徴、白鯨のプロトタイプとして認識できるが³⁾、ホホジロザメ自体は『ホワイ・ジャケット』にも『モービィ・ディック』にも、死の使いとしてのその心象が提示されている。

2.3 『モービィ・ディック』の鯨

『モービィ・ディック』では白い鯨という中心的表象に付帯する周辺の表象の一つとして、ホホジロザメをはじめとする鯨類が、冷酷無慈悲さと残酷性の象徴的存在のように描かれる。

作者はまず、42章「鯨の白きこと」でホホジロザメを登場させ、その白い色が人間の深層心理で死に直結することを例証する。白色がもつ多重な意味を分析する「私」イシュメイルは、極度の恐怖と嫌悪感を惹起する存在としてシロクマとホホジロザメをあげ、「白い屍衣を着た熊や鯨」(*MD*, 189)⁴⁾ と表現しながら、ホホジロザメには「死のもつ白い静謐さ」(*MD*, 190) があると語り、他の例を複数あげながら、白い色は、究極的には、死を連想させ、死に対する恐怖を呼び覚ますと結論付けている。

次に彼は「恐ろしい海洋」を泳ぐ「無慈悲な」鯨を語るが、海は恐ろしい人間世界ないし人生のメタファーであり、その恐ろしい残酷な海を泳ぐ鯨は冷酷無慈悲な人間のメタファーになっている。

海の狡猾さを考えてみよ。目に見えぬ恐ろしい生き物が愛らしい青色の下に身を隠して泳いでいる。優美な姿の鯨のように悪魔的輝きと美しさをもつ無慈悲な種族の存在を考えてみよ。海中で行われる共食いを今一度考えてみよ。海の生き物は皆、互いに食い合い、創生以来、永劫の戦いを続けている…この恐ろしい海洋が緑の陸地を取り巻いているように、人の魂の中にはタヒチ島があって平和と喜びに満ちているが、半ば知った人生の恐怖に包囲されている。(MD, 274)

ピークォド号が日本沖の穏やかな大抹香鯨漁場に入った時にメルヴィルは、イシュメイルの口を通して「人は、海の表面の静謐な美と輝きを目にすると、その下で激しく鼓

動する虎の心臓の存在を忘れ、ピロードのようになめらかな足が残忍な爪を隠していることを思い出そうとしない」(MD, 491)と語り、海の実像を「残忍な爪」を隠しもつ虎として映し出している。また一等航海士スターバックの口を通しては「おまえ〔海〕の中にいる歯がぎっしりと並んだ鯨ども、そして食人種のように人をかっさらうおまへのやり方」⁵⁾(MD, 492)と語り、海を鯨や食人種に喩えている。このようにメルヴィルは、海面下の海の実態、すなわち、表面化の人間世界の実態を残忍な虎や鯨や食人種に比している。

さらにメルヴィルは鯨を追う捕鯨ボートと鯨肉を食べる人間を鯨に比している。インド洋上でスタップ艇が巨大な抹香鯨^{たお}を斃す場面では「ボートは今や沸き立つ海面を、体全体をひれと化した鯨のように疾走した」(MD, 285)と表現し、その斃した鯨の料理を食す二等航海士スタップを鯨に比して「神さま！あいつが鯨を食うんじゃなくて、鯨があいつを食ってほしい。あいつのほうが鯨の旦那よりずっと鯨らしいぜ」(“Wish, by gor! whale eat him, ‘stead of him eat whale. I’m bressed if he ain’t more of shark dan Massa Shark hisself [.]” — MD, 297)と老黒人コックのフリースに言わせている。

フリースは、スタップに命じられて、鯨の屍体に群がる鯨に対してピーコド号の舳越しに説教をするが、このばかばかしく無意味な説教は、教会に集う会衆に対する説教に擬せられている。したがって、フリースのこの言動は、鯨のように残酷な人間たちに対する教会の説教のパロディーであり、その意図は、人間世界という残酷な海に生きる残忍で貪欲な人間たちに対するキリスト教会の説教の無意味さを比喩的に描出することにあると推察される。フリースの説教文句は以下の通りで、この説教を通じてメルヴィルは端的に、人間は鯨と同じだと語っている。

仲間の生き物の皆さんよ、おまえらの貪欲さ加減をわしは非難せんよ。それが天性で、しょうがないもんな。けど、その邪悪な天性を抑えるってことが大切だ。おまえらは確かに鯨だ。しかし、自分の内の鯨を抑制すれば、なんとおまえらは天使になる。天使ってのは皆、よく律された鯨以外の何物でもないんだから。(“Your woraciousness, fellow-critters, I don’t blame ye so much for; dat is natur, and can’t be helped; but to gobern dat wicked natur, dat is de pint. You is sharks, sartin; but if you gobern de shark in you, why den you be angel; for all angel is not’ing more dan de shark well goberned.” — MD, 295)

鯨に関する最も凄絶な描出は「丸い海全体が1つの巨大なチーズで、鯨どもはチーズの中の蛆虫」(MD, 302)と見紛うほどに鯨の屍体に群がる鯨を、クィークエグらが鯨切開用スベードを使って殺戮する場面での鯨の行動描出で

ある。

彼らは悪鬼のごとくに、互いのとび出たはらわたに噛みつくのみならず、しなやかな弓のように体を曲げて自らのとび出た内臓にかじりついた。そして、その臓物はその同じ鯨の口からのみ込まれた後、あぐりと開いている傷口から外へとび出し、再びのみ込まれてはまた傷口からとび出すことを繰り返しているようだった。(MD, 302)

仲間のはらわたも自らのはらわたさえも食らう鯨の生態描写は加虐的自虐的残酷性の極致を表すものとしてとらえられようし、メルヴィルは鯨を非人間的残酷性の化身として描出したと認識できよう。

さらにメルヴィルは、このようにして殺戮した鯨の内の1匹がクィークエグの手を噛み切ろうとした際に、「鯨を創った神は、ひとりの忌まわしいインジンにちがいない」(“de god wat made shark must be one dam Ingin.” — MD, 302)とクィークエグに言わせることにより、鯨を、19世紀当時の白人アメリカ人がアメリカ先住民に対して抱いていた固定観念である野蛮と残酷性の化身として描出している。

3. 「文明化された残酷性」

メルヴィルは、鯨に説教をするフリースを通して鯨と人間とを同列視しているが、鯨と人間の共通項は、両者の冷酷無慈悲で野蛮、残忍な所業にある。メルヴィルの作品中に描出される鯨の所業は上に整理した通りで、鯨は死のイメージを付与され、冷酷無慈悲で残忍な人間のメタフォーになり、蛮性と残酷性の象徴的存在になっている。

では、人間の冷酷無慈悲な所業はメルヴィルの作品中にどう描出されているか？彼は、処女作『タイピー——ポリネシアの生活を垣間見て』(1846)で白人文明人による残酷行為の具体例を列挙し、それら一連の行為を「文明化された残酷性」(civilized barbarity — *Typee*, 125)⁶⁾というフレーズで総括した。そして、その後の作品で彼は、動物および人間自身に対する白人文明人の残酷性を数々の具体例に描出している。以下にそれらの具体例を総覧してみよう。

3.1 動物に対する残酷行為

メルヴィルは時折、ぎょっとするほど凄惨で残酷なシーンを描いている。人間が、それも作者自身を含めた白人文明人が動物たちを斃して血まみれにする残酷なシーンの描出の背後に、自らを含めた白人文明人の残忍無慈悲な所業を糾弾する姿勢と彼の動物に対する慈しみの心を私たちは読み取ることができる。

3.1.1 牛

メルヴィルは第2作『オムー——南海の冒険談』(1847)で冷酷無慈悲な牛殺しを描いている。「私」を含めた白人4名が現地ポリネシア人を荷物かつぎとして従えて牛狩りに行き、親子3頭の家族を発見して、皆殺しにする凄惨な殺戮場面を作者はこう描写する。

子牛は土くれのように倒れた。母牛は叫び声を上げ、茂みに頭を突っ込んだが、振り向き、うめき声を出しながら、死んだ子牛の傍に来て、ぐるぐるとその周りを回りながら、血だらけの鼻先でにおいを嗅ぎ続けた。茂みを砕く音と咆え声が逃げる雄牛の位置を教えた。

すぐにもう1発が撃たれ、雌牛は倒れた。現地人たちに死んだ動物の処理を任せて私たちは雄牛を追った。恐ろしい鳴き声が雄牛の倒れている場所を教えた。雄牛は肩を撃たれ、恐怖と激痛から茂みの中に跳びこんだのだが、私たちが行った時には、緑の窪地に倒れこんで、黒い鼻づらを自らの血の池に突っこみ、体中に血の塊がはねていた。

ヤンキーは銃を構え、次の瞬間、野獣は空中にはね、前脚を折りたたんでうずくまるかたちで死んだ。(Omo, 220-1)⁷⁾

さらに、血の臭いを嗅ぎつけて現れた野豚2頭も撃ち殺し、殺した動物たちを運ぶ「彼ら〔現地人たち〕の裸の背には血のりがべったりと付いていた」(Omo, 222)と、メルヴィルは血塗られた情景を直截に語るが、文明が作り出した銃を手にした白人文明人による残虐行為を非難したりはしない。そして「私」たちが1年以上ぶりに口にする新鮮な牛肉で、深夜遅くまで宴会を楽しんだことを淡々と語る。

しかし『モービー・ディック』では、牛を殺して食べる行為を、生存のために必要に迫られて人肉を食う食人種の行為にも劣るものとして、徹底的に断罪している。

最初に牛を殺した人間は殺人者とみなされたことに疑いの余地はない。もしかしたら絞首刑に処せられたかもしれない。牛たちによって裁判にかけられていたとしたら、当然そうだったであろうし、殺人者が絞首刑に値するなら、牛殺しも当然絞首刑に値する。(MD, 299-300)

3.1.2 豚

『ホワイト・ジャケット』では、物語と同時進行の戦闘は発生しないが、登場人物の回想談というかたちで2つの戦闘場面をメルヴィルは描いている。その内の1つは、黒人老船員による30年余前の英米間の最後の海戦の回想であり、その黒人船員が米国人であるにもかかわらず公海上で英フリゲート艦マケドニアン号に強制徴用されて、この作品の舞台である米フリゲート艦ネヴァーシンク号と交戦し

た際の砲列甲板の惨状をメルヴィルは「屠殺場」や「肉屋の露店」に喩え、その中を豚が走り回るおぞましい光景を描出している。

マケドニアン号内の「屠殺場」では、頭上の横梁と縦梁に血と脳味噌が飛び散っていた。ハッチ周辺は肉屋の露店のようで、人肉の断片が環付きボルトにくっついていて、豚が甲板を走り回って無傷で生き延びたが、血だまりの中を嗅ぎ回った豚の体には血がべったりとこびりついていて、船が旗を降ろして降服した時、船乗りたちは、その豚を食うなんぞとんでもない人肉食いだと言って、船外に放り投げた。(WJ, 316)

この描写に続けて「別の四肢動物、山羊がこの戦闘で前肢2本を失った」(ibid.)という短い1文を1段落としてメルヴィルが付け加えているのを目にすると、彼は戦闘で死傷した人間たちよりも、その巻き添えて犠牲になった動物たちのほうに同情している様子が奇異な感じがするくらいにはっきりと見てとれる。動物愛護と背中合わせになっている彼の人間嫌悪、最後の長編『信用詐欺師——彼の仮面劇』(1857)で明確に表明される人間嫌悪の深さを傍証する1文と言えよう⁸⁾。

3.1.3 鷺鳥

メルヴィルの動物をいたわる心に裏打ちされた残虐行為批判は、白人文明人の食習慣をも標的にしている。『モービー・ディック』では読者を「鷺鳥を地面に縛り付けて肥大化させた肝臓をパテ・ド・フォワ・グラにして喜んで食べる文明開化のグルメのきみ」(MD, 300)と呼び、次のように問いかけながら、白人キリスト教文明人の欺瞞に満ちた残虐行為を批判している。

ナイフの柄を見てもよ、ローストビーフを食している、わが文明開化のグルメのきみよ。その柄は何で作られているのか？きみが食べている牛の兄弟の骨でなくて何だ？さらに、あの太らせた鷺鳥をむさぼり食った後、何を使って歯をつつくのか？その同じ鳥の羽根でだ。しかも鷺鳥虐待防止協会の書記はどんな羽ペンで回状を書いていたか？この協会がスチールペン以外は使わないと決議したのは、ほんの1、2ヶ月前のことだ。(MD, 300)

3.1.4 鯨

『モービー・ディック』の61章から70章にかけての捕鯨—鯨食—鯨の解体処理—鯨の屍体遺棄までの一連の行動の描写中には凄惨な血の光景が複数出現する。まず捕鯨シーンで、体中に鉋を突き刺された鯨が血を流す光景をメルヴィルはこう描く。

赤い血潮が怪物の体中から流れ出るさまは、丘を下る

小川の流れのようだった。海水ではなく血の海の中を激痛でのたうつ鯨は、泡立ち沸き立つ血の航跡を長々と引きずった。陽は傾き、深紅の血の海の照り返しを受けた鯨捕りたちの顔は赤色人種のように紅潮した。(MD, 285)

続けて彼は、心臓を突き刺された鯨が赤ワインの^{おり}のうな血の塊を噴き出して息絶える姿を描く。

断末魔のものがきは弱まり、鯨はもう一度波打つようにしてその姿を見せた。鋭く裂けるような苦悶の呼吸音を出しながら、痙攣を起こしたように断続的に噴気孔を広げ、収縮させた。最後には、赤ワインの紫色の^{おり}のうに凝固した血の塊が、どどと噴き上げられ、動かなくなった鯨の脇腹を伝って海に滴り落ちた。鯨の心臓が破裂したのだ！(MD, 286)

捕鯨シーンに続けてメルヴィルは、このようにして殺した鯨の尾の身のステーキをスタッフが食べる場面を描くと同時に、さらに、フランスや英国の宮廷における鯨食の歴史やスコットランドの修道士たちが好んだ海豚食などを紹介しながら、白人キリスト教文明人による鯨食の実態を明らかにする。続いて、乗組員総出で鯨の脂肉をはぎ取り、鯨油を取るための脂肉処理作業をする場面では「象牙色のピークォド号は屠殺場と化し、水夫は皆、屠殺人となった。傍目には私たちが1万頭の血染めの牛を海神たちに捧げているように見えたことだろう」(MD, 303)と語る。最終的には「頭部を切断され、脂肉をはがされた鯨の白い体」(MD, 308)が海上に遺棄されるが、この遺棄屍体に群がる鯨と海鳥を見て「私」イシュメイルは「おお、おぞましき地球のハゲワシの所業！その所業からは最強の鯨といえども逃れえない」(MD, 308)と結ぶ。

メルヴィルは捕鯨や鯨食を良きこととして推奨しているわけではない。彼はまた、捕鯨や鯨食を悪しきこととして批判し、過激な動物愛護の観点から、それらの禁止を独善的、偽善的に訴えているわけでもない。彼は、あくまで人間行動の実態としてのそれらの行為を忠実に描出し語っているものであり、作品の中ほどで次のように述べることによって、捕鯨船に乗組んだ彼自身も必然的にこれらの行為の一部を担っていることを率直に認めている。

キリスト教世界と文明から長期間追放された状態にある人間は、神の御手によって置かれた時の状態、つまり野蛮と称せられる状態に必然的に立ち返る。本物の鯨捕りは「アメリカ北東部インディアン」イロクォイ族と同様の蛮人である。私自身、蛮人であり、食人種の王にしか忠誠を示さず、しかもいつでも反逆する用意がある。(MD, 270)

とは言え、人間に狩られる巨鯨を鷹に追われる小鳥に喩えながら、その可哀想すぎる姿を描出するメルヴィルからは、牛や豚、鷺鳥と等しく、鯨を含む生き物全体に対する愛護の精神が読み取れる。以下は、右側のひれがないために真直ぐに泳ぐことができず、しかも黄疸らしき病気を患っている雄の老鯨を追い、屠る場面である。

それは恐ろしい、哀れそのもので、気狂いじみた光景だった。鯨は頭部を突き出し、悶え、続けざまに潮を噴き上げながら、激痛と恐怖に駆られて、片方しかない惨めなひれを横腹に打ちつけていた。こっちへあっちへとよるめきながら逃げ、大波に突き当たるたびに発作的に海中に潜ったり、空中で片ひれをぱたぱたと打ちつけながら横向きに転がったりした。片方の翼が傷ついた小鳥が、海賊のような鷹から逃れようとして恐怖に駆られながら空中でぐるぐると無駄に舞う姿を見たことがある。だが、鳥には声があり、悲痛な鳴き声で恐怖を伝える。しかし、この巨大な物言わぬ海の獣の恐怖は、彼の中に鎖でつながれて閉じ込められたままである。噴気孔を通しての窒息しそうな呼吸音を除いては、彼は声をもたず、そのことが彼の姿を言葉にできないほどに哀れなものにしていた。その驚異の巨体、落し格子の顎、絶大な力をもつ尾には、彼を哀れむどんな猛者をも戦慄させるに足るものがあつたのではあるが。(MD, 354-5)

最終的に三等航海士の「残酷なフラスク」(MD, 353)によってとどめの一刺しを入れられて断末魔の苦しみを味わいながら、当時の白人文明社会に灯りをとますために老鯨が死に絶える情景は、むごたらしさと悲哀に満ちている。

憐れみは無用だった。老齢で、片腕しかなく、目は盲いていようとも、彼は死ななければならないし、人間たちの楽しい婚礼や歓楽を照らすために、そして万物の万物に対する無条件の非攻撃的姿勢を説法する厳粛な教会の灯りをとますために、殺されなければならない。自分の血の海の中をのたうち回りながら、ついに彼は、脇腹の下部にある1ブッシェル容器ほどの大きさの、奇妙に変色したこぶのような突起部をちらと見せた。

「急所だ」とフラスクは叫んだ。「そこを一突きさせてくれ」

「やめろ！」とスターバックは叫んだ。「その必要はない！」

だが情け深いスターバックの指示は間に合わなかった。投擲の瞬間、その無残な傷口から潰瘍性の血がほとばしり、耐え難い激痛に刺し抜かれた鯨は濃い血を噴きながら、怒り狂い、盲滅法にボートに突進し、勝ち誇る乗組みたちに血糊の雨を降らし、フラスクのボートを転覆させ、その舳先を破壊した。それは瀕死の一撃だっ

た。この時までにはすでに大量失血した彼は、破壊したボートから力なく転がるようにして離れて行った。横向きになってあえぎながら、力なくばたばたと付け根部分しかないひれを動かし、終わりに近づく世界のようにゆっくりと転がって行き、仰向けになって白い陰部をさらし、丸太のように横たわって死んだ。(MD, 357-8)

3.2 人間に対する残虐行為

メルヴィルは『タイピー』で「私たちが『野蛮人』と呼ぶ彼らは、その称号にふさわしくなるようにさせられているのだ」(Typee, 26)と述べて、太平洋の島々に生きる人間たちに対する欧米からの侵略者たちの、つまり、白人キリスト教文明国の兵士たちや冷血極悪な商人たちの残虐非道な所業が、未開の純真な人間たちを野蛮な復讐者に、すなわち、いうところの『野蛮人』に変えたことを、具体的事例に触れながら、メタフォーや象徴など一切使わずに直截な言葉で糾弾している。そして、イングランドにおける残虐極まりない処刑方法に触れながら、真の野蛮人は白人文明人であり、白人文明人が最も野蛮だと結論付けている。

彼らが食人種になるのは、敵に対する復讐心を満たす時だけである。私は聞きたい、単なる人肉食が、文明開化されているイングランドでわずか数年前に行われた慣例的行為を残虐さの点ではるかに上回っているのかと。イングランドでは、おそらく嘘をつき、愛国心にもとる行為をしたなどの極悪の罪で有罪を宣告された国賊が、大きな斧で首は刎ねられ、はらわたを引きずり出されて火の中に投げ入れられた。さらに、その体は八つ裂きにされ、刎ねた首とともに槍で刺して、人の集まる場所に陳列され、腐りただれるままに放置されたのである！

死をもたらす道具の発明に私たちが際限なく発揮する悪魔的技能、戦争遂行時の復讐心、その結果もたらされる荒廃した惨状。これだけでもう、白人文明人が地球上で最も獰猛な動物だということをはっきりさせるのに充分である。(Typee, 125)

実際に現地ポリネシアの人々の間で暮らし、彼らと交流したメルヴィルの目から見ると、野蛮人はポリネシア人ではなくて白人文明人のほうであり、ポリネシアの人間が逆に宣教師となってアメリカに派遣されてもよいくらいだとも彼は語っている。

『野蛮人』という表現は間違った相手に対して使われていると私は考える。熱病のような文明がもたらす汚れた空気の中で発生するあらゆる悪徳と冷酷非道な所業を考えてみる時、私は、相対的不品行に関する限り、4、5人のマルケサス諸島の人間を宣教師として合衆国に送ってみたら、同様の役目でマルケサス諸島に派遣される同

じ数のアメリカ人と同程度に役立つのではないかと私は考えたくなる。(Typee, 125-6)

メルヴィルはさらに、戦争遂行時の人間の人間に対する残虐性にもスポットライトを当てている。『ホワイット・ジャケット』ではジャック・チェイスが仲間たちに語る海戦体験談という設定で、砲撃を受けてショック死した少年弾薬運搬員の姿を言葉少なに描出している。

砲撃で粉碎された舷牆から立ち上る粉塵が消えると、その子がまだじっと座っているのに気付いた。彼の両目は見開かれたままだった。『おれの可愛いヒーロー！』とおれは叫んで彼の背中をたたいたが、彼は顔を下にしておれの足元に倒れた。心臓に手を当ててみると死んでいた。その子の体には指1本も触れた跡がなかった。(WJ, 319)

メルヴィルは戦争を「それ[戦争]にまつわることはすべて、愚かそのもので、キリスト教精神に反し、野蛮、残忍で、フィジー諸島と人肉食、硝石と悪魔を連想させる」(WJ, 315)と断罪し、「兵士であろうと船乗りであろうと、戦う者は悪鬼である」(WJ, 320)と結んで、戦争を非人間的な「悪鬼」の行為として否定している。彼は戦争を、人間の人間に対する残虐性が最も分かりやすいかたちで発現される場として認識していたと考えられる。

4. 「死の大顎」——『イズリエル・ポッター』の海戦

メルヴィルの作品中で海戦が描出されるのは『ホワイット・ジャケット』と第8作『イズリエル・ポッター——異郷での50年』(1855)のみで、しかも『ホワイット・ジャケット』では登場人物に過去に海戦体験を語らせるという形式での短い海戦描写を行っており、物語と同時進行の海戦シーンが詳細に描出されるのは、唯一、『イズリエル・ポッター』のみである。

『イズリエル・ポッター』は、メルヴィルの全9作の長編中で一番短い、また、最も底の浅い作品である。彼が1849年初秋に入手した実在の人物の伝記的種本をベースにして書かれた、波乱に富んだ活劇的物語だが、メタフォーや象徴は、海戦を照らし出す「人面月」(the Man-in-the-Moon)と「死の大顎」としての海の深淵以外に目立つものはない。メルヴィルは出版社宛に、執筆中の『イズリエル・ポッター』について「内省的叙述はわずかで、重々しい記述はゼロです。冒険物語です」⁹⁾と書いたが、実際その通りである。『モービー・ディック』で酷評され、『ピエール——曖昧』(1852)でさらなる悪評をこうむった彼が、生活のために世間が求める類のものを書いてやろうと考えて書いたのではなからうかと思われる、深みのない、浅薄で軽く読み通せる物語であるが、しかし、この作品で

の海戦シーンの描出は秀逸であり¹⁰⁾、このシーンを見るためにだけにでもこの作品を読む価値があると言ってよいほどである。

海戦シーンの描写は「勇猛果敢、無節操、無謀で、弱肉強食の考え方と果てしなき野心をもち、外面は文明化されているが内実は野蛮なアメリカは、世界の国家群の中のポール・ジョーンズであり、今も依然として、そのような存在なのかもしれない」(IP, 120)¹¹⁾ という、文明という仮面をかぶった野蛮なアメリカを語る叙述で始まり、文明が作り出した武器を使用しての凄絶な蛮性の発現を描出している。

凄惨な海戦は、夜7時から10時までの3時間にわたって、仲秋の満月の下で、ヨークシャーの高い崖と岬の上から何千という数の群衆が見つめる中で、アメリカのリチャール号とイギリスのセラピス号との間の決闘という様相を呈して行われる。月が水平線上に顔を出すと、両艦の舷側砲の一斉射撃が始まり、取っ組み合って格闘するような格好で、マストの帆桁を絡ませ合い、一斉砲撃し合うと同時に、帆桁上からマスカット銃を撃ち、手榴弾を投擲する戦闘シーンが描出される。両艦の総員の半数が死傷した海戦の描出を締め括る以下の文にメルヴィルの戦争観と文明観が集約されている。

リチャール号は殺戮に飽食し…硫黄のあらしの中で爆発して、ゆっくりと沈み、ゴモラのように視界から消えて行った…文明開化された人間と野蛮人を分かつものは何か？文明は別個のものか、それとも蛮性の進化の一段階なのか？(IP, 130)

メルヴィルは、文明という仮面の奥に隠されている蛮性と残酷性を人間の属性として冷ややかに認識していたようである。なぜなら、彼は『タイピー』と『オムー』で南海の現地人がもつ未開の自然な蛮性とその地を侵略する白人の文明化された蛮性を対比して語り、文明化された蛮性による残酷な所業を批判し糾弾していたからであり¹²⁾、そして『イズリエル・ポッター』の凄絶な海戦を照らし出す月を「にやりと笑う人面月」(the grinning Man-in-the-Moon—IP, 123)と表現しているからである。この月は作者の顔を映じていると推断できる。

『イズリエル・ポッター』に鯨の姿は直接的には出て来ないが、しかし、「艦と艦の境の深淵は双方にとって死の大顎であった」(IP, 125)という1文中にメルヴィルは死のメタファーとして鯨の大顎のイメージを使用しており、この1文は彼が『モービー・ディック』で寸描した「鯨どもが待ち遠しように船の甲板をじっと見上げている姿」を想起させる。『モービー・ディック』で彼は、海戦中の船の甲板を口を開けて見上げる鯨たちの姿を引き合いに出しながら、無数の鯨が鯨の屍体に群がって脂肉に食らいつく情景がいかに凄まじいものであるかを、こう語っている。

赤い肉が切り分けられているテーブルの周りに集まる腹をすかせた犬たちのように、硝煙に包まれた海戦の恐怖と悪魔的所業の真っ只中で、殺されて放り落とされる人間を一飲みしよう、鯨どもが待ち遠しように船の甲板をじっと見上げている姿が目に見えるであろうが、そして、甲板テーブル上で勇猛な屠殺人たちが、金色に塗られ、ふさ飾りを付けた肉切り包丁で、互いの生身を食人種のように切り刻んでいる間、テーブル下の鯨どもも、宝石のような歯がはめ込まれた口を開けて騒々しく死肉を切り分けているが…それでも、夜の海上の捕鯨船に横付けされた死んだ抹香鯨の周りほど連中が無数に楽しそうに集まっている光景を目にすることはない。(MD, 293)

この長い1文中にメルヴィルは、鯨も人間も等しく冷酷、残忍、無慈悲な側面をもっている実態を描出している。彼の作品群総体の中では、確かに、鯨が、それもユダヤ・キリスト教の神を後ろ盾とする白人キリスト教文明の化身たる白い鯨が要の位置を占めており、自らのDNAを組成するこの白い存在がメルヴィルの追求と断罪および否定の対象の中心にあったが¹³⁾、同時に、残酷な海を泳ぐ冷酷無慈悲な鯨にも、残酷な人間世界でうごめく残忍な人間たちの化身としての隠喩的、象徴的意味が付与されていることを私たちは理解しておきたい。

5. おわりに——メルヴィル晩年の鯨

『イズリエル・ポッター』出版直後に書かれた中編『ベニート・セレーノ』(1855)にも一度だけ鯨がさりげなく言及される場面があるが、そこではメルヴィルは、愛する者を水葬に付きねばならなかったことを嘆くデラーノ船長の口を通して「すべてを——食べ残しを犬たちに与えるようにして——すべてを鯨どもに投げ与えるなんて！」¹⁴⁾と云って、人間の死と屍肉を鯨に直結させている。このようにメルヴィルは、30代半ばまでに書いた諸作品中で、ホホジロザメをはじめとする鯨総体に忌まわしい死のイメージを付与すると同時に、死を仲介する冷酷無慈悲な残酷性と蛮性の化身として鯨を描出したが、晩年に彼がつづった詩の中にも残酷な死の仲介者としての鯨を登場させている。

最後の長編『信用詐欺師』の出版から2年近く後に行った講演『南海』(1858年12月～1859年3月)では、彼は鯨については一切語らず、鯨、メカジキ、マンタの順に3種の海中生物に言及しているが、鯨に関しては、太平洋の鯨の個体数の多さを比喩的に強調して「シナ帝国に清国人が密集するごとくに太平洋各地に生息する鯨の各種族」(tribes of sharks that populate some parts of the Pacific as thickly as the celestials do the Chinese Empire)¹⁵⁾と述べているのみである。しかし、死の3年前に自費出版した詩集『ジョン・マーと他の水夫たち、および海の詩編』(1888)と死

の4ヶ月前に自費出版した詩集『ティモレオン他』(1891)の中には、『マーディ』、『ホワイト・ジャケット』そして『モービー・ディック』で描出されたホホジロザメ等の鯨と同様に、死のイメージを色濃く付与されたホホジロザメ他の鯨が登場する。

海洋と南の島々への懐旧の情を詠じた『ジョン・マーと他の水夫たち、および海の詩編』中の「海の詩編」には14の詩が収められており¹⁶⁾、最初の「ミズナギドリ」と10番目の「モルディブの鯨」に鯨が登場する。ホワイト号の提督が彼の指揮下の水夫らとともに海の底に眠る情景で終る「ミズナギドリ」では、海洋の光景の一部として鯨たちの姿が寸描されるが、それらの鯨は「腹をすかせた海」の化身、すなわち、人間を死に引きずりこむ残酷な海の化身であるかのように詠われている。「腹をすかせた海は獵犬のように船体を駆り立て、鯨はミズナギドリの群れをつけまわす」(The hungry seas they hound the hull, / The sharks they dog the haglets' flight;)¹⁷⁾と。そして、死相を帯びた鯨とパイロットフィッシュ(水先案内魚としてのブリモドキ)の共生を詠った「モルディブの鯨」に現れる鯨は、「屍室のごとき口」で「おどましき肉をむさぼり食う青白き生き物」として、死の表象体と化している。

The Maldive Shark

About the Shark, phlegmatical one,
Pale sot of the Maldive sea,
The sleek little pilot-fish, azure and slim,
How alert in attendance be.
From his saw-pit of mouth, from his charnel of maw
They have nothing of harm to dread,
But liquidly glide on his ghastly flank
Or before his Gorgonian head;
Or lurk in the port of serrated teeth
In white triple tiers of glittering gates,
And there find a haven when peril's abroad,
An asylum in jaws of the Fates!

They are friends; and friendly they guide him to prey,
Yet never partake of the treat —
Eyes and brains to the dotard lethargic and dull,
Pale ravener of horrible meat.

この詩に詠われる「ゴルゴンのような頭」をもつ「モルディブの海の青白き痴れ者」は、鯨の種としては、『マーディ』で「メドゥサの頭髮」(Mardi, 54)を振るようにして動く「不細工な嗜眠性の化け物」(Mardi, 53)として描出され、パイロットフィッシュと共生するさまが語られたShovel-nosed Sharkであろうが、この「鈍重なやつ」で「嗜眠を貪る老いぼれ」は老年のメルヴィル自身を映じて

いるようにも思える。

「モルディブの鯨」は『マーディ』と連動して解釈される必要がある¹⁸⁾。『マーディ』での失われたイノセンス探求航海の結末近くで、若きタジがホーシャからの3人の使者が乗る舟の後についてホーシャの住むフロツェラ島へ向かう際、「3匹の光り輝くパイロットフィッシュが前方を泳ぎ、3匹の飢えた鯨が後から追って来た」(Mardi, 641)とメルヴィルはつづる。「私」タジを先導する3匹のパイロットフィッシュはホーシャからの3人の使者で、セイレンに喩えられる南海の美しい娘たちの化身であり、性の誘惑を意味し、「3匹の飢えた鯨」は「私」の罪の意識と良心の呵責を体现する復讐者たちの化身である。フロツェラ島に着くと、タジを案内したパイロットフィッシュたちは現地ポリネシアの娘たちの姿に戻り、「青い衣を身にまとった…3人の黒い目の娘たち」(Mardi, 645)が現れる。「パイロットフィッシュが変身した!」(ibid.)と若き吟遊詩人ユーミイが叫び、「夜の目をもつ3人の使者に!」(ibid.)と老歴史家モヒが続ける。『マーディ』で語られるShovel-nosed Sharkと共生するパイロットフィッシュは「明るい鋼青色」(Mardi, 54)をしており、パイロットフィッシュになってタジを先導した3人の使者は「青い衣を身にまとった」姿に戻り、「モルディブの鯨」のパイロットフィッシュも「青くてほっそりして」いて、いずれもパイロットフィッシュであるブリモドキの特徴的な色合いを呈している。

『マーディ』のパイロットフィッシュは南海の娘たちで、性の誘惑を意味していたが、「モルディブの鯨」と共生するパイロットフィッシュは誰で、何なのか?やはり、性の誘惑か?否、そのようには見えない。鯨の「屍室のごとき口」は、パイロットフィッシュたちにとって「のこぎり歯の港」で「安全な場所」であり「運命を司る3女神の大顎の中の避難所」と詠われているので、鯨が老年のメルヴィル自身だとすれば、パイロットフィッシュは彼の友人たち、もしくは彼の子供たちや孫娘たちなのかもしれない。そして、白人キリスト教文明社会を敵に回して世間に抗し続けた、イシュメールのようなメルヴィルにとって、パイロットフィッシュは数少ない愛すべき存在を意味するのかもしれない。いずれにせよ、1つだけはっきりしていることは、「モルディブの鯨」が「屍室のごとき口」で「おどましき肉をむさぼり食う青白き生き物」と詠われて、死と悪魔的残酷性の化身のごとくに描出されていることである。

あるいは、パイロットフィッシュはメルヴィル自身でもあるのかもしれない。『モービー・ディック』の最終場面で、空の棺につかまって「葬送の海」(MD, 573)に浮かぶイシュメールの傍を「危害を加えぬ鯨たちが、まるで口に南京錠をかけたかのようにして通り過ぎた」(ibid.)と作者はつづったが、イシュメールは白鯨追撃物語を進行するパイロットフィッシュのような役割を担っていた。した

がって、パイロットフィッシュとしてのイシュメイルにとって、死と虚無の象徴たる空^{から}の棺は、鯨のように冷酷無慈悲な海、つまり鯨のごとくに残酷な世間からの避難所だったと解釈できる。クイーケグがその棺に入ってみて、生きる意志を取り戻して死の淵から復活したように、「無意識のうちに棺屋の前で立ち止まり、葬列に出くわすたびに、列の後に必ずついて行く」(MD, 3) イシュメイルも、死と虚無に直面することにより生への意志が蘇るのである。メルヴィルは死に取り憑かれながらも、常に生を希求していた。そのことは死んだ脚と生きている脚の上に立って歩くエイハブの姿に象徴的に表れている。

鯨は終生メルヴィルにつきまとい、死のわずか4ヶ月前に出版された『ティモレオン他』(1891)に収められている「遠い昔の旅の果実」中の「脇の小運河で」¹⁹⁾にもその姿を鯨とともに見せる——「私は泳いできた／鯨の黒い尾びれとホホジロザメのひれとの間を」(I have swum — I have been / 'Twixt the whale's black flukes and the white shark's fin;). この隠喩的表現をどう解釈すべきか？鯨の尾びれには一撃で捕鯨ボートを粉砕し鯨捕りを死に至らしめる力があることをメルヴィルは『モービー・ディック』の86章「尾」で語っていた。したがって、死と破滅を内包する鯨と鯨に挟まれて泳ぐという隠喩的情况にメルヴィルが投入したのは、自分の人生は死と隣り合わせだったという認識である。彼がこの詩を書いたのは、1857年初夏にヨーロッパ・中東旅行からニューヨークに帰って間もない頃だったかもしれないし、また、死の直前の出版に際して最後の推敲を施したかもしれない。いずれにせよ、死ぬ間際に一冊にまとめて発表した作品中に鯨と鯨の並列メタフォーが現れることの意味は大きい。一般にモービー・ディックという名の鯨で知られる作家メルヴィルの表象として、白い鯨とともに白い鯨が認知されてしかるべきであろう。

註

- 1) 『マーディ』のテキストは Herman Melville, *Mardi: and A Voyage Thither*, eds. Harrison Hayford, et al., (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1970) を使用し、引用には頁を付す。
- 2) 『ホワイ・ジャケット』のテキストは Herman Melville, *White-Jacket; or The World in a Man-of-War*, eds. Harrison Hayford, et al., (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1970) を使用し、引用には、省略されたタイトル、頁を付す。
- 3) 拙稿「元軍艦乗組員メルヴィル——『ホワイ・ジャケット』に込められた意味」(『海—自然と文化』東海大学紀要海洋学部第7巻第3号, 2009) 参照。
- 4) 『モービー・ディック』のテキストは Herman Melville, *Moby-Dick; or, The Whale*, eds. Harrison Hayford, et al., (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1988) を使用し、引用には、省略されたタイトル、頁を付す。
- 5) [] 内の語句は筆者が補った。以下同じ。
- 6) 『タイピー』のテキストは Herman Melville, *Typee: A Peep at Polynesian Life*, eds. Harrison Hayford, et al., (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1968) を使用し、引用には頁を付す。
- 7) 『オムー』のテキストは Herman Melville, *Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas*, eds. Harrison Hayford, et al., (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1968) を使用し、引用には頁を付す。
- 8) メルヴィルの人間嫌悪に関しては拙稿「メルヴィルの仮面劇——人間愛と人間不信」(『海—自然と文化』東海大学紀要海洋学部第8巻第1号, 2010) 参照。
- 9) Merrell R. Davis and William H. Gilman eds., *The Letters of Herman Melville* (New Haven: Yale University Press, 1960), p. 170.
- 10) アドラーは海戦シーンが描出される章を「この本のベスト・セクション」と評価し、砲火と煙に包まれる艦船を月光が照らし出す遠景と砲煙内部の船上で行われている大殺戮のクローズアップを対比的に描くメルヴィルの手法を論じている (Joyce Sparer Adler, *War in Melville's Imagination* [New York and London: New York University Press, 1981] pp. 82-3).
- 11) 『イズリエル・ポッター』のテキストは Herman Melville, *Israel Potter: His Fifty Years of Exile*, eds. Harrison Hayford, et al., (Evanston, Illinois: Northwestern University Press, 1997) を使用し、引用には、省略されたタイトル、頁を付す。
- 12) 拙稿「『タイピー』を通して見る「白鯨」——直截な白人文明糾弾から象徴的断罪へ」(『海—自然と文化』東海大学紀要海洋学部第4巻第3号, 2006) および「メルヴィルの『オムー』に見る半文明化されたタヒチとモーレア——南海の楽園を侵食する白人キリスト教文明の功罪」(『海—自然と文化』東海大学紀要海洋学部第6巻第1号, 2008) 参照。
- 13) 拙稿「メルヴィル対白人キリスト教文明(1)——出航まで」(『海—自然と文化』東海大学紀要海洋学部第8巻第3号, 2010) および「メルヴィル対白人キリスト教文明(2)——人物と表象」(『海—自然と文化』東海大学紀要海洋学部第9巻第1号, 2011) 参照。
- 14) Herman Melville, "Benito Cereno" in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*, eds. Harrison Hayford, et al., (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1987), p. 61.
- 15) Herman Melville, "The South Seas," *op. cit.*, p. 413.
- 16) 『ジョン・マーと他の水夫たち、および海の詩編』は「ジョン・マーと他の水夫たち」、「海の詩編」、そして「小石」の3部構成になっており、「ジョン・マーと他の水夫たち」では、フロンティアが消滅した19世紀後半のアメリカの大平原の只中に生きる元水夫ジョン・マーの

懐旧の念を語る。彼は少年の頃から船乗り稼業に就いていたが、フロリダ沖の海賊との戦いで負傷して身体が不自由になったため陸に上がり、さまざまな仕事に就きながら内陸の大平原にやって来て、そこで放浪人生に終止符を打ち結婚するが、伝染病により若い妻と幼い子供を失う。「水平線が丸く取り囲む大平原はジョン・マーに大洋を思い起こさせた」。そして老年になった彼は、かつての船乗り仲間たちを「亡霊のように」思い浮かべ、夢幻の内に彼らに語りかける。心の中に棲む亡き妻に向かって昔の軍艦乗組み仲間たちのことを語る「花婿ディック」、母港へ帰航途中の軍艦内で死の床に伏す老齢の下士官からの彼の仲間たちへの別れの言葉をつづった「トム・デッドライト」、そして陽気で軽やかな若き水夫を詠った「ジャック・ロイ」の3編で「ジョン・マーと他の水夫たち」は締め括られる。

「海の詩編」には14の詩が収められている——1. ホワイト号の提督が彼の指揮下の水夫らとともに海の底に眠る情景で終る「ミズナギドリ」、2. 空気の精の嘆きとともに海上を漂う難破船を詠った「寄せ波亭の風神の竖琴」、3. 嵐の岬を廻って母国へ帰航する船で寝ずの見張りをする水夫に捧げる「流星号のマスター」、4. 船の円材を束ねて作られたいかだに布切れが掲げられているが、生きていた乗組みも死んだ乗組みも大波にさらわれたか、いかだの上に誰もいない「沖合い遠く」、5. 人間には届かぬ静かな高みに君臨するグンカンドリを詠った「グンカンドリ」、6. 若い男女の船首像がリーフに落ちてうつ伏せに横たわるさまを詠った「船首像」、7. エーゲ海東岸のイズミールからの船がみぞれ吹きすさぶ冬のボストンに積荷を降ろして帰る姿を詠った「良き船ユキヒメドリ」、8. ロイヤルマストを張ったままホーン岬を廻ろうとして難破した船を詠った「難破したカリフォルニア快速帆船の若き船長の忠言」、9. 孤独な海から打ち上げられた海藻を詠った「海藻の塊」、10. パイロットフィッシュと共生する、死相を帯びた鯨を詠った「モルディブの鯨」、11. かつてネッドと放浪した「異教の海の真正のエデン」であるマルケサスの島々への郷愁と憧れを詠った「ネッドへ」、12. 失われた遠い過去の愛への憧憬を詠った「熱帯を横切りながら」、13. 氷山に激突して沈む船を詠った「氷山」、そして最後の14. 「羨望の島々」では南海の島々への憧憬を吐露している。

「小石」では、7編の短詩に海洋の心象を詠じ、最終的には「非人間的な海」をほめたたえる。

- 17) メルヴィルの詩のテキストは Herman Melville, *Published Poems; Battle-Pieces, John Marr, Timoleon*, eds. Robert C. Ryan, et al., (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 2009) を使用した。
- 18) 拙稿「『マーディ』での若きメルヴィル(1), (2), (3)—喪失と幻滅」(『海—自然と文化』東海大学紀要海洋学部第6巻第2号, 2008, 第6巻第3号, 2008, 第7巻第1号, 2009) 参照。
- 19) メルヴィルの日記によると、彼は、1856年10月から翌57年5月にかけてのヨーロッパ・中東旅行中、4月1日夕

から6日早朝までヴェニスに滞在した。滞在中、彼は頻繁にゴンドラに乗っているが、5日、日曜の日記には「リアルト橋まで歩いた。大運河沿いをくまなく見た後、さらに散策。美女多数。ティツィアーノの女性たちの豊潤な褐色の肌は実物から描かれた」(Herman Melville, *Journals*, eds. Howard C. Horsford with Lynn Horth, [Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1989], p. 119) と記している。彼はヴェニスの美女たちに魅せられたようだが、「脇の小運河で」では、ゴンドラに乗っている「私」を誘う眼差しから逃れ去る心境を、セイレンからの逃避になぞらえて詠っている。

参考文献

- Adler, Joyce Sparer. *War in Melville's Imagination*. New York and London: New York University Press, 1981.
- Arvin, Newton. *Herman Melville*. New York: The Viking Press, 1950.
- Auden, W. H. *The Enchafed Flood, or The Romantic Iconography of the Sea*. New York: Vintage Books, 1950.
- Berthoff, Warner. *The Example of Melville*. New York: The Norton Library, 1962.
- Bowen, Merlin. *The Long Encounter: Self and Experience in the Writings of Herman Melville*. Chicago: The University of Chicago Press, 1960.
- Braswell, William. *Melville's Religious Thought: An Essay in Interpretation*. New York: Octagon Books, 1973.
- Chase, Richard. *Herman Melville: A Critical Study*. New York: The Macmillan Company, 1949.
- Chase, Richard. *The American Novel and Its Tradition*. New York: Doubleday Anchor Books, 1957.
- Davis, Merrell R. and Gilman, William H., eds. *The Letters of Herman Melville*. New Haven: Yale University Press, 1960.
- Dryden, Edgar A. *Melville's Thematics of Form: The Great Art of Telling the Truth*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1968.
- Feidelson, Charles, Jr. *Symbolism and American Literature*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1953.
- Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel (Revised Edition)*. New York: Dell Publishing Co., Inc., 1966.
- Franklin, H. Bruce. *The Wake of the Gods: Melville's Mythology*. Stanford, CA: Stanford University Press, 1963.
- Gale, Robert L. *Plots and Characters in the Fiction and Narrative Poetry of Herman Melville*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1972.
- 林信行『メルヴィル研究』東京：南雲堂、1958。
- Howard, Leon. *Herman Melville: A Biography*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1967.
- Lawrence, D. H. *Studies in Classic American Literature*, Penguin Books, 1971.
- Lewis, R. W. B. *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century*. Chicago and London:

- The University of Chicago Press, 1955.
- Leyda, Jay, ed. *The Melville Log*. New York: Gordian Press, 1969.
- 牧野有通『世界を覆う白い幻影—メルヴィルとアメリカ・アイデオロジー』東京：南雲堂, 1996.
- Mason, Ronald. *The Spirit Above the Dust: A Study of Herman Melville*. Mamaroneck, N.Y.: Paul P. Appel, Publisher, 1972.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. New York: Oxford University Press, 1941.
- Maugham, W. Somerset. *Ten Novels and Their Authors*. London: Vintage, 2001.
- Metcalf, Eleanor Melville. *Herman Melville: Cycle and Epicycle*. Westport, Conn.: Greenwood Press, Publishers, 1970.
- 大橋健三郎編『鯨とテキスト—メルヴィルの世界』東京：国書刊行会, 1983.
- Parker, Hershel, ed. *The Recognition of Herman Melville: Selected Criticism Since 1846*. The University of Michigan Press, Ann Arbor Paperbacks, 1970.
- Parker, Hershel. *Herman Melville: A Biography Volume 1, 1819-1851*. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1996.
- Parker, Hershel. *Herman Melville: A Biography Volume 2, 1851-1891*. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 2002.
- Porte, Joel. *The Romance in America: Studies in Cooper, Poe, Hawthorne, Melville, and James*. Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 1969.
- Reynolds, David S. *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1988.
- Rollyson, C. and Paddock, L. *Herman Melville A to Z: The Essential Reference to His Life and Work*. New York: Checkmark Books, 2001.
- 酒本雅之『砂漠の海—メルヴィルを読む』東京：研究社, 1985.
- Scribner, David, ed. *Aspects of Melville*. Pittsfield, Mass.: Berkshire County Historical Society at Arrowhead, 2001.
- 曾我部学『ハーマン・メルヴィル研究』東京：北星堂書店, 1972.
- Stern, Milton R. *The Fine Hammered Steel of Herman Melville*. Urbana, Chicago, and London: University of Illinois Press, 1968.
- 寺田建比古『神の沈黙—ハーマン・メルヴィルの本質と作品』東京：筑摩書房, 1968.
- Thompson, Lawrance. *Melville's Quarrel with God*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1952.
- Wadlington, Warwick. *The Confidence Game in American Literature*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1975.
- Weaver, Raymond M. *Herman Melville: Mariner and Mystic*. New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1968.
- Wright, Nathalia. *Melville's Use of the Bible*. Durham, N.C.: Duke University Press, 1949.

(メルヴィルと鯨をテーマとする先行研究は、筆者がこれまで目を通した範囲内では残念ながら見当たらない。しかし、過去1世紀余の間には、どこかで誰かが論考しておかしくないテーマと考えられるので、もし今後発見できたら参考文献リストに付け加えたい。)

要 旨

メルヴィルは、『マーディ』で多様な海洋生物を語る中で、鯨にまずスポットライトを当てており、その後、『モービー・ディック』で鯨にズームインしている。鯨は冷酷さの化身として描出されており、象徴的海洋生物として、鯨に次ぐ重要な位置を彼の作品群の中で占めている。

鯨と人間と、どちらがより残酷か？メルヴィルは暗にこう問いかけているようであり、鯨は、人間世界の残酷な海に生息する冷酷無慈悲な人間のメタファーとして、そしておぞましい死の象徴として作品に登場する。

彼は、動物および人間に対する人間の、特に白人文明人の残酷性を生々しく描出して糾弾している。人間の利益と幸福のために牛、豚、鵜、鯨が無残に殺される、哀れで痛ましい情景描写の背後には、人間と動物の生命を等しく慈しむ作者の心情が見てとれる。『ホワイト・ジャケット』では人間の人間に対する残忍性が最もどぎつく発現される戦争の人非人的冷血性が断片的に語られ、『イズリエル・ポッター』での「にやりと笑う人面月」の下で戦われる凄絶な海戦は、文明という仮面の下に潜む、人間の本質に内在する蛮性の表出の典型例となっている。

鯨は終生メルヴィルにつきまとい、彼が晩年につづった詩にも残酷な死の仲介者としてその姿を見せる。